小郡市人権センター通信

Vol.17
H24.2.1

『福島の子どもたちは今』
～震災と人権について考える～

［講　師］福島市 学童保育「おやま子どもクラブ」
主任指導員 **芳見千鶴**（よしみ ちづる）さん

プロフィール
福島市在住。7年前から学童保育の指導員となり現在に至る。
※「おやま子どもクラブ」は福島市の委託を受け、保護者会で運営。
放射能の影響で、昨年3月に34名いた子どもが現在20名に減少。

日　時　平成24年2月10日（金）　開演19:30～
場　所　小郡市人権教育啓発センター（大集会室）

どんなおはなし…？

未曾有の大震災が東日本を襲いました。災害発生当初は被災地、被災された皆さんのために手を差し伸べようというみんなの思いが全国に広がりました。

しかし、あれから一年も経っていない今も、あの時の思いは私たちの心の中に変わらず生き続けているでしょうか。放射能に汚染されていないことが証明されているにもかかわらず、被災地の農・水産物の購入拒否などが続いています。各地に避難されている方々への偏見、差別、いじめも問題になっています。そしてなによりも、被災地への無関心、被災された皆さんの心に近づこうとする思いの不足がいま私たちに問われてはいないでしょうか？

講師の芳見千鶴さんは福島市の学童保育「おやま子どもクラブ」で、地震・原発事故の不安や苦しみをかかえた子どもたちと日々接しながら支援を続けておられます。今回の公開講座では震災・原発事故当時やその後の生活の様子などを、子どもたちの姿を中心にしながらお話ししていただきます。

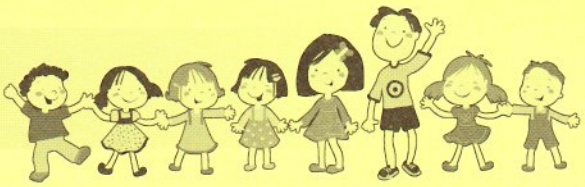
改めて震災を振り返りながら「私たちが今、そしてこれからすべきことは何か」や「人と人のつながりの大切さ」などについて皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

お誘い合わせの上、ぜひご参加ください。

《問合せ先》　小郡市人権教育啓発センター
TEL 80－1080（直通）

手話通訳あり
入場無料

確かめることの大切さ



大震災と言われながら、被災地から離れて生活している私たちはその現実を目にすることが少なく、どうしても関心が薄くなりがちです。そしてその関心の薄さが差別や偏見を生む原因の一つにもなっています。私たちが直接被災地に足を運ぶことは困難ですが、さまざまな方法で確かな情報を集め、正しく知ることが大切です。

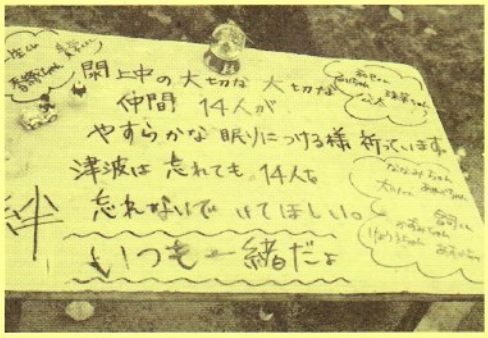
そのような中、昨年12月上旬に福岡県教育委員会は防災教育充実のために県内の学校関係者を被災地の学校、教育委員会に派遣しました。小郡市からは小郡小学校の猪口浩一校長が参加されました。その視察報告の一部を寄稿していただきました。

東日本大震災の現地視察を通して学んだもの

小郡市立 小郡小学校　猪　口　浩　一

はじめに、今回の東日本大震災に際し亡くなられました多くの方々のご冥福を心よりお祈りいたします。また、被害を受けられました多くの皆様にお見舞いと一日も早い復興を願っています。

私たちの調査団は宮城県南部を中心に視察しました。



はじめに仙台市若林区の閖上（ゆりあげ）地区へ向かいました。閖上地区は海岸にも近く甚大な被害を受けたところです。住宅街にもかかわらず学校や一部のビル以外は建物が残っておらず地震・津波の被害は想像を絶するものがあったと思います。

最初に視察した閖上中学校は震災当日が振替休日で帰宅しており、14名の生徒が尊い命を亡くしました。学校に入ってみると瓦礫の一部が残っており教室とはかけ離れた姿を見せていました。玄関の方に回ってみると津波避難所という看板が倒れていました。また、玄関先には花が添えられ、「14人の友達はいつまでも忘れない・・・」という言葉が書かれていました。友達に向けたメッセージには発する言葉もなく息がつまりました。近くの閖上小学校体育館では、地震・津波で流された品々を瓦礫の中から取りだし、ついた泥を洗い保管されていました。保管されている物の中には、まだ引き取り手がない家族写真・卒業証書などがあり、それぞれの思い出深い数々の品々に心が痛み、一日も早い復興と共に持ち主に戻ることを強く願いました。

翌日は、隣の福島県に隣接した亘理（わたりくん）郡山元町の中浜小学校（児童数59名）の視察に行きました。中浜小学校は海岸から約300mのところにあり、10m前後の大きな津波の被害を受けた学校で、学校以外の建物はほとんど津波で流された地区です。中浜小学校は校舎が大きな津波にも耐えうるように海岸線に対し直角に建てられており、また校舎周りの外壁も頑丈に造られていました。そのため、大津波が来たら屋上施設に逃げるようにと歴代の校長先生から職務の引き継ぎが

津波直後の中浜小学校

行われていたそうです。ただ、避難場所としては2㎞もある山手の中学校が指定されており、はたして全校児童を避難させることが時間的に可能かどうか日ごろから教職員と話し合っておられました。当日は大津波警報が出て10分後には、迷わず屋上施設（屋根裏部屋）へ避難させたそうです。ただ津波の高さが思ったよりも高く、あと2m津波が高かったら大きな被害を受けていたという言葉には、子どもたちの命を預かる同じ校長職として、同じ判断ができたのか自問自答しても答えは出ませんでした。大津波が押し寄せたときは“ゴォー”という地響きの中で肩を寄せ合いながら耐えたそうです。大津波後、学校だけが取り残され、頑丈とされた外壁も粉々に倒され、学校周りの住宅がすべて流されたのは茫然自失で声も出なかったそうです。子どもたちは、屋上施設に避難し、大津波が目前に迫って住宅が流されるなどの状況を実際に見ずにすんだのは、その後の心のケアの軽減につながったとおっしゃっていました。翌朝に自衛隊のヘリコプターに発見され全員救助されたそうです。

2階天井付近まで津波を受けた中浜小学校

お話の最後に、現在復興に向けて町民一丸となって頑張っているが、被災を受けた学校が今後の津波対策として建造物に不適な場所と指定され、同じ場所には学校としては建て替えることはできないと言われました。学校は子どもたちがいての学校であり、復興しても元の学校には戻ることができない住民の皆さんや先生方の無念さを感じました。

また、安全であった山手の山下第一小学校には一部に黄色のロープで囲まれた場所がありました。その場所は福島原発事故の影響で放射線が基準値よりも高く立ち入り禁止になっていました。近くの山の中にも放射線が強いところがあり、校長先生方は放射線が目に見えずわからないので不気味であり、復興に向けて解決の道が見えないとおっしゃっていました。一日も早い復興に向けて、国としての積極的な法的整備と実施、そして、国民全体の継続した支援体制の必要性を強く感じました。

結びに、改めて一人ひとりの命はかけがえのないこと、そして、人と人とのつながりを大切にし、人権に基盤を置いた被災時における弱者からの視点を活かした支援体制の整備、防災時における学校と地域との連携など、安心安全の人権のまちづくりを早急に構築していく必要があることを感じました。そのことが本当の意味での「きずな」を深めることにもなると思いました。

＜写真の一部は大震災写真保存プロジェクトから引用＞

私たちは日ごろ自分が、そして大切な人が、「生きている」という実感を持たず、また目の前にあるものはそのままあることが当然だと思いながら日常を送っています。そんな日常が突然壊れ、目の前からなくなってしまったら、そして先の見えない生活が続くとしたら・・・・。そんな被災地の皆さんの思いに少しでも近づこうと努力しながら、生きること、つながることの意味をもう一度見つめ直してみたいものです。

『生きる』

谷川俊太郎　作

生きているということ
いま生きているということ
それはのどがかわくということ
木もれ陽がまぶしいということ
ふっと或るメロディを思い出すということ
くしゃみすること
あなたと手をつなぐこと

生きているということ
いまいきているということ
それはミニスカート
それはプラネタリウム
それはヨハン・シュトラウス
それはピカソ
それはアルプス
すべての美しいものに出会うということ
そして
かくされた悪を注意深くこばむこと

生きているということ
いま生きているということ
泣けるということ
笑えるということ
怒れるということ
自由ということ

生きているということ
いま生きているということ
いま遠くで犬が吠えるということ
いま地球が廻っているということ
いまどこかで産声があがるということ
いまどこかで兵士が傷つくということ
いまぶらんこがゆれているということ
いまいまがすぎてゆくこと

生きているということ
いま生きているということ
鳥ははばたくということ
海はとどろくということ
かたつむりは はうということ
人は愛するということ
あなたの手のぬくみ
いのちということ

私が、この詩を見たとき、この中の様々な言葉が、小川に落ちた木の葉のように流れていきました。ほとんどの言葉が日々見かけることで、あまりにも日常的なことだったからです。

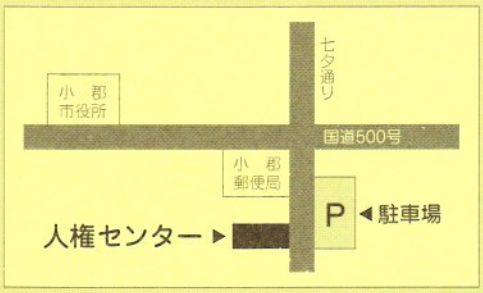
しかし、それから数日後、家族の癌を宣告され、「死」を考えた時、この谷川俊太郎さんの「生きる」という詩が、全く別のものに感じられたのです。それぞれの言葉の形や色や音、そして動きや温もりが……まるでその様々な場面に自分がいるかのように。さらに一緒に過ごした日々の色々な場面が思い出され、もはやこの「生きる」は“わたしの「生きる」”になりました。生きているということは、一瞬一瞬の積み重ねであり、とてもいとおしいものであることだと思いました。

新しい年が始まり、毎日があわただしく過ぎていきます。ときには時を止めて、自分の「生きる」を、周りの人たちや、またその周りの人たちの「生きる」を考えてみてください。一人ひとり違った「生きる」があるはずです。どこからか聞こえてきます。

「あなたは、いまをしっかり生きていますよ。それがすてきです。」

そして、時には「生きていた」人のことも思い出してください。あなたの中で今も生きている事に気付きます。

「あなたが、生きていたその事が、とっても素敵なことでした。」　（H・I）



小郡市人権教育啓発センター

（所在地）　〒838-0141　小郡市小郡２９６
（電話＆ＦＡＸ）　０９４２－８０－１０８０（直通）
（Ｅメール）　oh-rec@iwk.bbiq.jp
（ホームページ）　http://www.oh-rec.org/